

1.「稚内港北防波堤ドーム」(稚内市)

稚内一樺太大泊間の旧稚泊航路整備の一環として、冬季の北西越波防止のために建設された半アーチ式ドーム。海上からの高さ14m、柱間6mの円柱70本を並べた長さ427mの世界でも類を見ない独特の景観と構造を持ち、港湾土木史に残る傑作であるとともに、旧樺太航路時代の記憶を残す歴史遺産。設計者は、当時26歳の土木技師・土谷実。



2.「宗谷丘陵の周水河地形」(稚内市)

宗谷丘陵に見られるなだらかな斜面は、約1万年前まで続いた氷河期の寒冷な気候のもと、地盤の凍結と融解の繰り返しによって土がゆっくりと動くことでつくられたもので、周水河地形と呼ばれる。周水河地形は北海道に広く分布するが、宗谷丘陵では山火事によってその独特な地形が際立っている。日本最北端のこの丘陵には広大な肉牛牧場が広がり、夏季には豊かな自然に育まれた健康な黒牛が放牧されている。



3.「天塩川」(流城市町村)

天塩川は延長256km、北海道第2位の長大河川。松浦武四郎は天塩川内陸調査の途上で「北海(加伊)道」を命名したとされる。川の名前の由来となったテッシ(アイヌ語で「梁」の意味)が数多く点在し、河口までの160kmを一気に下ることができる日本有数のカヌー適地としても知られ、愛好者たちは20ヵ所のカヌーポイントから大河を下っていく。



4.「留萌のニシン街道

(旧佐賀家漁場、旧花田家番屋、岡田家と生活文化) (留萌地域)

ニシン漁は、松前藩の時代から北上するニシンを追い千石場所を変えながら、地域にさまざまな物語を残した。豊漁、薄漁、凶漁と気まぐれに押し寄せるニシンに翻弄され、いったん群衆を見ると番屋では数の子や身欠きニシン作りにあけくれた。ある年、ニシンは忽然と姿を消したが、そんなニシン漁の賑わいをニシン街道の番屋と生活文化は今に伝える。



5.「増毛の歴史的建物群

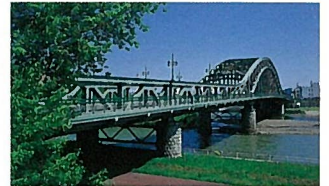
(駅前歴史的建物群と増毛小学校) (増毛町)

留萌線の終着駅「増毛」。駅の周りには明治初期から営業を続けてきた「旧商家丸一本間家」を始め、日本海の風雪に耐えた石造りや木造の建物が並ぶ。高台にある増毛小学校は昭和11年に建築された戦前期都市型木造校舎としては道内唯一の現役校舎。今も子どもたちが元気に学び、体育館ではコンサートも開かれるなど、卒業生をはじめ町内外の多くの人に親しまれている。



6.「旭橋」(旭川市)

「いくつの時代と思い出を刻みながら、人々の暮らしをみつめてきた橋があります」——『旭橋』という名の豆本の書き出しである。旭橋は道北の中心都市旭川市を流れる石狩川に架かる橋で、明治25年、現在の位置に土橋が架けられたのに始まり、昭和7年、鋼鉄製のアーチ曲線を描く橋が、当時の最新技術をもって竣工した。川のまち・旭川の象徴。



7.「土の博物館『土の館』」(上富良野町)

サノ農機株式会社が開設している「土の博物館」は、北海道開拓が過酷な気象条件の中で進められた経緯や、土と人間の関わり大切さを今に伝える。とくに高さ4mの巨大な土の標本展示は世界に類を見ず、大正15年に起こった十勝岳噴火による泥流災害の凄さと、どん底から見事に立ち直っていった人々のたくましさを感じ取ることができる。



8.「雨竜沼湿原」(雨竜町)

増毛山地の標高850mにあり、北海道の山地湿原の中ではもっとも大きな高層湿原。大小の真円形の池塘(ちとう)が百数十あり、独特の景観を見せる。湿原植物も豊富で、昭和39年に道指定天然記念物、平成2年に暑寒別・天売・焼尻国定公園特別保護地区に指定された。「雨竜沼湿原を愛する会」による活動は、湿原を未来に伝える大切さと難しさを教えてくれる。



9.「北海幹線用水路」(空知地域)

赤平市から南幌町まで延長約80kmにおよぶ北海幹線用水路は、農業専用では日本でもっとも長い。空知平野の農地に水を供給するために設けられたもので、北海道の穀倉を支える役割を果たしている。空知川から水を取るために大正13年に着工された北海頭首工を起点に、美唄市には調整池が、岩見沢市などの市街地では親水公園が整備されている。



10.「空知の炭鉱関連施設と生活文化」(空知地域)

空知は国内最大の産炭地として最盛期に約100炭鉱、83万人の人口を擁し、日本の近代化を支えたが、エネルギー政策の転換による合理化、閉山が相次ぎ、空知の炭鉱は姿を消した。地域に残る炭鉱関連施設は生産から生活まで多岐にわたり、まさに屋根のない博物館。また、三笠市を発祥とする北海盆踊りなど、ヤマは今に続く多くの生活文化を空知に残している。

